

91

富士に雪われに装うなにあるや晩秋はかく過ぎゆきにけり

ふくしまやすき  
福島泰樹

【歌意】富士山に雪が積もる季節となった。私には装う何があるのだろうか。晩秋はこのように過ぎてゆく。

〈鑑賞〉僧侶でもある作者は、「短歌絶叫コンサート」という独特の短歌朗読のスタイルを生み出し、全国各地でライブ活動を行っています。文字に書くだけの短歌ではなく、謡われ、ひびきや調べによって、時空すらも越えた相手に想いを届けていく短歌——作者には、この歌をはじめ、富士山を詠んだ歌も何首かあります。

92

亡き父の誕生日けふ真白なる富士を父の機中に見たり

いとうかずひこ  
伊藤一彦

【歌意】亡き父の誕生日である今日、真っ白な富士山をまるで父のように思いながら飛行機から見つめていた。

〈鑑賞〉今日は亡き父親の誕生日。機中から見ることのできるこの真っ白な雪を被った富士山を、私は遥かなる父として敬い見ていた、という歌です。「おとうとよ忘るるなかれ天翔ける鳥たちおもき内臓もつを」「声とどくかぎりがわれのふるさとぞ空行く月に呼びかけやまぬ」等、故郷の宮崎を拠点に活躍している歌人です。長年、教育現場にも携わっている心あたたかな人です。

93

遠景に一点白き富士ありてわれに新しき年始まりぬ

三枝昂之

【歌意】はるか遠くに一つの点の白い富士山があった。今、私に新しい年が始ま  
つていく。

〈鑑賞〉遙か遠い場所に、たった一つの点に見える白い富士山が在り、今、新た  
な年が始まっていく——巖かにして果てしない、遙かな原点。それがこ  
の富士山に象徴されるものなのだ、という思いの込められた一首です。

94

富士山は見えなくなりてもある気配大きな窓辺に晚餐終はる

今野寿美

【歌意】富士山は見えなくなってもそこにいる気配がする。大きな窓辺で今日の晚餐  
は終わった。

〈鑑賞〉富士山がいつぱいに見える大きな窓。その部屋での晚餐。だんだん暗く  
なって富士山は見えなくなってしまっても、その存在感は確かに残って  
いるという一首です。

95

多摩川のかなたに浮かぶ金の富士小さけれども天空を支う

松平盟子

【歌意】多摩川の遠く向こうに、浮かぶように見えている金色の富士山。小さい  
けれどもまるで天空を支えているかのように見える。

〈鑑賞〉東京から見える夕暮れの富士山の光景です。「金色」で表現しているところ  
にも作者の思いが込められているのではないでしょうか。見える姿は  
小さくても、まるで天空を支えているように感じられる、という一首で  
す。

96 北齋の元の名春朗うららつらと富士をかすめて雲雀のあがる

栗木京子

【歌意】 葛飾北齋の元の名で春朗というものがある。その名のようにうららかな春。富士山をかすめるように雲雀が舞い上がっている。

〔鑑賞〕 『富獄三十六景』等の作品で知られる葛飾北齋の元の名に「春朗」というものが在ります。富士山を描いたこの画家の名前のように、うららかな春。富士山をかすめるように、眼の前では雲雀が天空に舞いあがっている、という一首です。

97 純白の石鹸で手を洗ひたり富士を見に行く十月の朝

小島ゆかり

【歌意】 富士山を見に行く十月の朝、純白の石鹸で手を洗った。

〔鑑賞〕 富士山を見に行くのにわざわざ手を洗わなくてもいいのですが、あえて「純白」の石鹸で洗ったという作者。他に混じりけのない「純白」の色で洗うというところに思いが伝わります。「純白」の「じ」と「十月」の「じ」の重ね合わせも印象的な一首です。

98 雪煙巻きつつ朝日を照り返す富士の冷気に触れて戻りつ

谷岡亜紀

【歌意】 雪煙を巻き上げながら朝日を照り返している富士山の冷気に触れて舞い戻った。

〔鑑賞〕 雪煙を巻き上げながら、朝の陽射しを照り返す富士山の冷気に触れて戻って来た、というのはハングライダーの歌なのでしょうか。古今東西、多くの人々が富士山を詠んだ中でも、こうした歌は珍しいと思います。

すなはま ある  
**砂浜を歩きながらの口づけを午後五時半の富士が見ている**

たわら  
**俵 万智**

【歌意】 砂浜を歩きながらの口づけを午後五時半の富士が見ていた。

〈鑑賞〉 たった二人だけの思い出の一瞬を、まるで富士山が見ているように思わず感じた作者。二人で「富士を見ている」のではなく、「富士が見ている」と詠む、若さ溢れる歌です。午後五時でも六時でもなく、五時半と細部にこだわった表現がなされています。

100  
**むらぎもの心に聳ゆる山在るは嬉しかりけりぶじのくにに生れて**

たなかあきよし  
**田中章義**

【歌意】 心にそびえる山があるのはうれしいことだ。富士山のあるこの静岡県に生まれて。

〈鑑賞〉 「むらぎもの」は「心」にかかる枕詞です。山は決して大地にのみそびえるものではなく、人々の心にもそびえ得るものだとして作者は思っています。駿河湾を臨む「用宗」で生まれ育った作者の自宅からは今日も富士山を拝むことができます。作者は今後、何百首・何千首の富士山の歌を詠むのでしょうか。